



白岩工業 品川シールド作業所 河合 仁所長

13年度に開通が予定されている中央環状品川線。その外回り線の「首都高速道路中央環状品川線シールドトンネル(北行)工事」が、鹿島JVで進められている。工事には多くのサブコントラクターが参画しており、その1社が白岩工業。同社「品川シールド作業所」所長が河合仁氏だ。河合所長は、中学生のころから「将来は土木工事に携わりたい」と考え、実際にその道に進んだ「根っからの土木技術者」。河合所長に、土木工事の楽しさ、職業としての魅力などを聞いた。

安全管理を徹底

工を達成した。一方、進行中の首都高速道路中央環状品川線シールドトンネル(北行)工事は、大井北立坑(東京都品川区八潮1丁目)から大橋ジャンクション(東京都目黒区青葉台4丁目)までの直径12・55m、延長8000mという世界最大級の大断面・長距離シールド工事。08年の起工時、同現場にはまさにうつつつけの人物として、大規模シールド工事に豊富な実績、経験を持つ河合所長が着任した。

世界最長のシールド工事を経験

河合所長は、これまでに地下鉄大江戸線の汐留駅構築、東京メトロ南北線の白金台駅〜目黒駅間、同半蔵門線の水天宮駅〜清澄白河駅間、東京電力の東西連携ガス導管敷設など、数々のシールド工事に従事してきた。中でも東京電力の工事は、

富津LNG基地(千葉県富津市)と東扇島LNG基地(川崎市川崎区)を東京湾下で結ぶ全長18kmのシールド工事で、河合所長は鹿島JVが担当する富津側からの9030mの区間に携わった。同工事のシールドは、外径が3・62mと比較的小規模だが、掘進距離の9030mは、シールド工法の世界最長記録。月進でも1168mの世界最速施設



SHIRAKAWA

根っからの“土木屋”を自認

3交代制。河合所長の勤務は1方だが、2方、3方の担当者と連絡を密にし、安全管理に余念がない。無事にシールドトンネルが貫通し、到達坑から流れる風を頬に受けたとき、そこでしか味わえない達成感が胸いっぱい広がるという。

中学生時代、土木技術のすばしさに感動

大学を卒業してから33年間、土木現場一筋の河合所長。今年14日、55回目の誕生日を迎えた。その河合所長が、土木技術者を志したのは中学生の時。東京都国立市で暮らしていた昭和40年代半ば、子どもたちの遊び場だった近所の小山が、ある日工事用万能板で囲まれ、数年後、そこに国道20号(甲州街道)から中央高速道の国立インターにつながる新しい道路ができた。日本が豊かさを求め成長を続けていた時代。舗装された新しい道路ができたたびに、人々は喜びを感じていた。河合少年も、その新しい道路が目の前に現れ、土木技術のすばしさに純粋に感動した。

自分で考えた方法で成功した時に大きな喜び

「負けず嫌いだ」と自身の性格を口にする河合所長から見ると、最近の若い社員は少し物足りないようだ。「失敗して責められるのを恐れるせいか、引つ込みがち。責任は僕が取るので、現場では自分が代理人という意識を持ってほしい」と苦言を呈する。そう述べる理由には、「土木の本当のおもしろさを知ってもらいたい」という願いがあからだ。

高校で進路を決める時に、すでに建設業界で働く決意は固まっていた。いずれは自らの裁量で現場を動かしたいと、大学に進学し土木工学を専攻。卒業後は、多摩地区や足立区の地場建設会社で、河川護岸、橋梁、宅地造成、水道管敷設などの工事現場を担当した。最初は要領、段取りがわからず、所長をはじめ先輩から怒られることがしばしばあったが、「1年後、2年後には、絶対に先輩を追い越してやる」という気持ちで、失敗や間違いを糧に、知識や技術を習得した。今から9年前、白岩工業の協力会社で仕事をしていたところ、その腕を見込まれ、同社に転職。以来、同社を代表する大規模現場の所長を任されている。

貫通し、到達坑から流れる風に達成感